「日々の理科」（第 2392 号）　2021,-1,29

「雪のあし跡１（ホンドギツネ）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

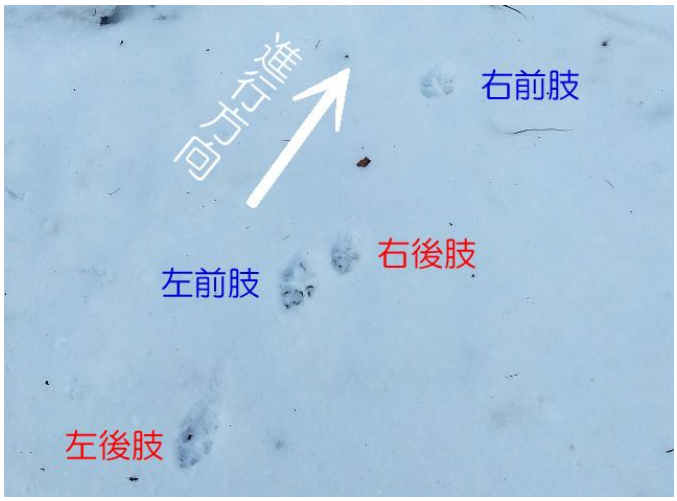
雪のない時期は、動物の姿こそ見えても、行動（移動経路）はわかりにくい。しかし冬は、雪上にたくさんの動物のあし跡が残っているので、動物自体の姿は見られなくても、動物の種類や移動経路はわかる。

特に雪が降ったの翌日の新雪の上には、「新鮮な」あし跡（×足跡　〇肢跡）が残っているので、観察には絶好のチャンスとなる。このような動物のあし跡のことを「アニマル・トラック」ともいい、この判別がつくと、雪の中を散策するのがとても楽しくなる。冬はクマが冬眠中なので、安心して歩けるのも良い。

北軽井沢には哺乳類だけでも、カモシカ、ニホンジカ、アナグマ、タヌキ、テン、アライグマ、ヒトなど、さまざまな動物がいるが、一番よく見かけるあし跡は「キツネ」（ホンドギツネ）のものである。

この程度の積雪の時が一番よく足跡が保存されている。雪が積もって何日かたつと、雪面がザラメ状になって、スタンプされにくくなる。また雪が深いと、動物が肢を抜く時に、周囲の雪で埋まってしまう。

キツネに限らず、動物は前肢と後肢の形状がずいぶんちがう。（実は一番ちがうのはヒト）しかしキツネの場合、接地面積は前肢も後肢もほぼ同じである。



キツネが歩いているのを見ていると、「右前肢と右後脚」を同時に動かし、そのあとに「左前肢と左後肢」を同時に動かす。ヒトの歩行の場合は「右手（右前肢）と左足（左後肢）を同時に動かす。キツネの場合はヒトとは逆である。その結果写真のように、右前肢と左後肢が並んだようなあし跡になることが多い。時には、尾を引きずった跡が残っていることもある。